

「精神分析史」研究の現在

——刊行にあたって

松本卓也

はじめに⁽¹⁾

フロイトおよび精神分析の歴史は、フロイト自身による歴史化に始まり、フロイトの存命中に刊行されたフリッツ・ヴィッテルスによる『ジークムント・フロイト——人物・学説・学派』(1924)⁽³⁾がつづき、フロイトを精神の解放者として描くシュテファン・ツヴァイクによる『精神による治療』(1931)⁽⁴⁾、フロイトの前史を実証的に再構成することを試みたジークフリート・ベルンフェルトの一連の論文を経て、『正史』であるアーネスト・ジョーンズによる『フロイトの生涯』(1953-57)⁽⁶⁾に至るまで、数多くの言葉が紡がれてきた。その後もピーター・ゲイの『フロイト』⁽⁷⁾等、数多くのフロイト伝や精神分析の歴史をめぐる書物や論考が書かれてきたことは周知のとおりである。⁽⁸⁾

もっとも、長らくのあいだ、精神分析における歴史記述は、それらの偉人伝か、さもなくばフロイトや精神分析の「虚偽」を暴き出そうとする偶像破壊的なものに二極化し、対立こそ深まれど、生産的

な研究がなされてこなかったきらいがある。⁽⁹⁾

前者の代表がジョーンスのフロイト伝だとすれば、後者の潮流はアンリ・エランベルジェの『無意識の発見』(1970)⁽¹⁰⁾以来に盛んになったいわゆる修正主義的な議論である(もちろん、『無意識の発見』自体は必ずしもフロイト批判ではない。しかし同書はフロイトを「無意識の発見者」の玉座から降ろすことによって、以降の展開の火付け役となったのである)。フロイトは自らが抛って立つ生物学的な語彙を後景化させることによって「孤独な天才」を装ったのだと断罪するフランク・J・サロウエイの『心の生物学者』(1979)、フロイトが誘惑学説から幻想理論への移行にともなって実際の虐待事例を見逃したとするジェフリー・ムセイエフ・マッソンの『真実との決別』(1984)⁽¹²⁾、そして精神分析の科学としての地位を厳しく問うたアドルフ・グリュンバウム『精神分析の基礎——科学哲学からの批判』(1984)⁽¹³⁾が、この潮流の代表的著作である。これらの成果をもとに一般向けにフロイト批判を大規模に展開し、同時期に白熱した「回復された記憶」論争と結びつけたのがフレデリック・クルーズの『メモリー・ウォーズ——争われるフロイトの遺産』(1995)⁽¹⁴⁾であり、「フロイト・ウォーズ」と呼ばれたその騒動の余波は、九〇年代半ばから後半にかけての米国議会図書館(Library of Congress)でのフロイト展をめぐる大論争にまで発展した。⁽¹⁵⁾

けれども——あるいは、それゆえに、⁽¹⁶⁾と言ったほうがよいかもしれないが——近年の欧米を中心とした精神分析研究では、とりわけドイツ語圏と英語圏において、「精神分析史(Geschichte der Psychoanalyse / History of Psychoanalysis)」と呼ばれる学術分野が明確な形を取るようになっており、それらの精神分析史研究では、偉人伝(正史)か偶像破壊(修正主義)かというかつての不毛な対立を超えて、科学史・社会史・文化史の方法論を取り入れた、一次史料にもとづいた実証的な歴史記述が展開されるようになってきているのである。⁽¹⁶⁾

「ニュー・フロイト・スタディーズ」の誕生

そのような新たな精神分析史の可能性を切り開いたひとりとして、まずはケンブリッジ大学の科学史・科学哲学の教授、ジョン・フォレスターの仕事をあげることができるだろう。⁽¹⁷⁾「フロイト・ウォーズ」と称される、一九八〇年代から九〇年代にかけて吹き荒れたフロイト／精神分析批判への独特の応答である『フロイト・ウォーズ通信』⁽¹⁸⁾によって知られる彼は、精神分析への批判においてありがちな「精神分析は科学であるのか、それとも疑似科学なのか」「フロイトは適切な科学的な手続きを踏んだか」という論点それ自体を棄却し、精神分析を科学史・科学哲学の対象として扱い、むしろ精神分析が、いったいどのような固有性をもつ科学であるのかを明らかにする方向に舵を切った。⁽¹⁹⁾それは、反証可能性の有無を金科玉条とするカール・ポパーの科学論の限界が明らかに、トマス・クーン、あるいはブルーノ・ラトウール、イアン・ハッキングなどが主導した現代の科学論の文脈と伴走しつつ、精神分析を現代の知の配置の中に正しく位置づけるための決定的な作業であった。

フォレスターのこれらの仕事は、精神分析とその歴史を人間科学に固有の推論様式を体现するものとして捉える可能性を開いた。⁽²⁰⁾それは、「フロイト・ウォーズ」の不毛な対立を超え、「精神分析がいかなる知的・社会的・制度的条件のもとで形成され、変容してきたか」を問うことを可能にし、近年の科学技術社会論(STS)の一角に精神分析史研究を位置づける道筋をつけたのである。

そのような背景のなかで生まれてきた新たな精神分析史研究にはさまざまなものがあるが、まずリディア・マリネッリとアンドレアス・マイヤーの『フロイト以後の夢——『夢解釈』と精神分析運動史』

(2002)を挙げないわけにはいかない。フランス語版タイトルの「フロイトと共に夢を見る(Réver avec Freud)」が的確に示すように、彼らの主張は次のような大胆なテーゼで要約される——精神分析の立脚点である『夢解釈』は、フロイトという一人の「偉人」によって生産された古典ではなく、読者という消費者からのフィードバックによって版を重ねるごとに変化していった、一種の共同作業の産物であった、と。それは、水曜会などができる以前から機能していた、読者をつなぐ動的な制度であり、さらには著者と読者のあいだに一種の転移を生じさせ、フロイト自身の夢分析を手本としながら彼の自己分析を追体験し、自らの実体験を調整することができるような特異な書物でもあったのである。

あるいは、新たな精神分析史の可能性を切り開いたもうひとりの先駆者としてエルンスト・ファルツェーダーのことを忘れてはいけない。彼は、後述するゲルハルト・フィヒトナーが築き上げた書誌的基盤の上に、ミヒャエル・シュレーターらとともにフロイトの書簡集の編纂に長らく関わってきた精神分析史研究者である。精神分析における膨大な一次史料の整理を行った成果をふんだんに利用して精神分析家たちの相互的な関係を仔細に可視化したそのエポックメイキングな仕事は、精神分析をフロイト一人を源流とする単線的なものではなく、ベルリンやロンドンといった各地の拠点が、特定の強力な個人を介して独自の影響圏を形成し、互いに複雑に絡み合う「スパゲッティ・ジャンクション」として描き出すことを可能にした。このようなネットワークの緻密な解明もまた、「偉人」としてのフロイト像を離れた、実証的な史料にもとづく新たな精神分析史研究の可能性を切り開いたのである。

アメリカの科学史家ジョン・バーナムが「ニュー・フロイト・スタディーズ」(2006)と呼んだ、一九九〇年代から登場したこのような新しい精神分析史の潮流は、かつての論争から距離をとり、(1)精神分析というひとつのディシプリンをフロイトという「独占的な中心」からではなく、さまざまなアクター

の相互作用のなかで捉え、(2)その際にテキストの生産だけでなく消費にも焦点をあて、(3)「正史」的な賛否両論から距離をとり、実証的な一次史料に依拠しながら、フロイト称揚にもフロイト批判にも回収されない書き方をする事がその特徴であるとされている。⁽²⁴⁾

もちろん、このような研究は、単に精神分析の歴史をUS・USや実証史学へと還元するものでは決していない。むしろ、フロイトという特権的な「偉人」を中心としてみるのではなく、忘れられた、ないし周縁化された分析家を含む広いネットワークのなかで精神分析の歴史を再考することは、既存のメジャーな理論が通用しなくなる現場にたえず出くわす臨床家にとっても有益な試みであろう(その重大な焦点のひとつがシャーンドル・フレンツィの再評価であったことは言うまでもない)⁽²⁵⁾。また、そのような試みは、精神分析運動を新たな視点から見ること――すなわち、ウィーンからチューリッヒ、ベルリン、ブダペスト、ロンドン、ニューヨーク、さらにはブラジル、インド、日本などへと伝播していく過程を、単なる「普及」ではなく、各地の文化との相互作用として分析すること――を可能にするが、それは、日本における精神分析の特殊性を考える上でも極めて重要であろう。⁽²⁶⁾くわえて、後に紹介するように、フィヒトナー、ファルツエーダー、シュレーターらによって整理され、その後も多くの発見がつづく膨大な一次史料にもとづく実証的な研究の数々は、フロイト(やその他の分析家)の臨床や理論にあらたな光をあててくれるのである。

『ルツィファアー・アモール』とドイツ語圏の精神分析史

さて、このような「精神分析史」⁽²⁸⁾ 研究がひとつの研究分野として確立されるにあたっては、専門的な学術雑誌の創刊と、定期的なシンポジウムの開催が重要な役割を果たしてきた。一九八八年に創刊された『ルツィファアー・アモール——精神分析史のための雑誌(Luzifer-Amor: Zeitschrift zur Geschichte der Psychoanalyse)』は、精神分析史を専門とする世界初のドイツ語学術雑誌である。

もちろん、同誌の刊行以前にもドイツ語での精神分析史研究は数多く存在した。たとえば、一九四七年に創刊された精神分析雑誌『プシュケー——精神分析とその応用のための雑誌(Psyche: Zeitschrift für Psychoanalyse und ihre Anwendungen)』は、ナチズムを経験した戦後西ドイツにおける精神分析の再建のために大きな役割を果たしたことで知られ、日本の専門家にも広く読まれてきたが、同誌には数多くの精神分析史の研究が収められている。なかでも、フランツ・バウマイヤーによる症例シュレーバーのカルテの発見を報告する金字塔的論文(1956)⁽²⁹⁾、グロデックの「エス」の出処をめぐるフロイトの誤認を扱うベルント・ニチュケのスリリングな論考(1983)⁽³⁰⁾やシャーンドル・フェレンツイの晩年の「母性的」技法論の再評価(1983)⁽³¹⁾などを掲載したほか、同誌はドイツの精神分析家のナチスへの関与をめぐる論争(1983, 1984)⁽³²⁾を喚起したこともある。この論争の相手方となったドイツ精神分析協会は二〇一六年に回顧的なシンポジウムを開催したが、そこではいまだにナチス関与の「恥」が直視されず特定の人物に罪をなすりつけようとする態度がみられるとする翌年のニチュケの批判的応答に見られるように、いまだ火種は燻っているようである。もっとも、『プシュケー』は精神分析のいわば総合誌であり、精神分析

史の雑誌ではない。けれども、このような一連の研究史が『ルツィファー・アモール』のような場所を誕生させた要因のひとつであったと言えるだろう。

さて、『ルツィファー・アモール』は、「精神分析史シンポジウム(Symposion zur Geschichte der Psychoanalyse)」と密接な関係をもっている。このシンポジウムは、一九八七年にカッセルでヘルムート・ユンカーとゲルハルト・ウィッテンベルガーによって創設され、一九九六年からはテュービンゲン大学医学史研究所のゲルハルト・フィヒトナーとアルブレヒト・ヒルシュミュラーによって継続され、現在はベルリンに拠点を移し、ミヒャエル・シュレーター、トーマス・アイヒホルン、ライナー・ヘルンらが主導している。⁽³⁴⁾

このシンポジウムや雑誌においてフィヒトナーが果たした功績は大きく、彼は早くから電子データを活用し、フロイトの発信・受信書簡あわせて一万一千通を超える規模の文献目録・データベースと、膨大な書簡のトランスクリプションをもとに文献学的調査のインフラを作りあげるとともに、その史料を惜しみなく研究者にも提供したという。⁽³⁵⁾彼の文献学的な厳密さは、フロイトのあらゆる著作を網羅しその対応関係を示した『フロイト書誌および著作対照表』⁽³⁶⁾を見ても明らかであろう。

さて、フロイトのフリース宛書簡に登場する言葉からその名前が採られた同誌で発表された成果は数多くあるが、とりわけインパクトが大きいのは、ウルリケ・マイによるフロイトの患者カレンダー(Patientenkalender)研究であろうか。⁽³⁷⁾彼女は、ロンドンのフロイト・ミュージアムに保管されていた未公開史料にもとづき、一九一〇年一〇月から一九二〇年二月のあいだのフロイトの三冊の患者カレンダーを調査した。詳細な検討の対象は、そこに記載されていた約一三〇名の患者のうち、国際精神分析協会の会員であり、かつフロイトの分析を受けたことがすでに知られていた十七名(シャーンドル・フェレンツィ、

ヘレーネ・ドイチュ、ルネ・スピッツ等」と、狼男を含むその他十九名の患者である。その結果、当時の分析の実態が、日曜と祝日をのぞく週六日、毎日一時間のセッションを基本としていたが、なかには一二時間や三時間というケースもあったこと、またウィーン外から訪れる患者のために、数ヶ月おきの集中的なセッションを継続するスタイル(トランシェ方式)が採用されていたことが実証された。衝撃的なのは、件の十七名の分析(すなわち、いわゆる訓練分析が制度化される前の「訓練分析」)がすべて、一年未満で終わっていることである。また、ベルリン精神分析インスティテュートによる制度確立以前には、分析の目標が治療なのか教育なのかは曖昧であり、治療期間中にも私的な付き合いや組織運営などの共同作業が行われていたこと、フロイトがいわゆる禁欲原則に縛られることなく状況に応じて関係性を調整していたことも明らかにされている。

さらにマイは、シュレーターと共同で、やはりフロイト・ミュージアムに眠っていた『快原理の彼岸』の一九一九年春の初稿を翻刻し、一九二〇年の初版(印刷稿)にかけての変化を丹念に辿ることによって、フロイトによる同論文の執筆過程と、そのなかでの概念の変化を明らかにした。とりわけ興味深いのは、「すべての欲動が死へ向かう」という初稿の主張が、第二稿では性欲動と自己保存欲動を救い出すために撤回されたこと、あるいはフロイトの愛娘ゾフィーが一九二〇年一月に死去したことが「死の欲動」の理論に影響を与えたとする通説が草稿の発見によって覆され——一九一九年夏にはすでにその原構想は書かれていたのである——、ゾフィーの死の影響があったとすればむしろエロスの導入のほうであったと論じられていることであろうか。⁽³⁸⁾ さらにマイとシュレーターは、フロイトの『自我とエス』の一九二二年の草稿も翻刻し、第二局所論の到来を告げるこの論文の成立過程を再構成している。⁽³⁹⁾

また、同誌の大きな特色のひとつは、すでに紹介してきたような実証的な歴史研究や、ここでは紹介

しきれない種々の精神分析運動史の研究に加えて、知られざる一次史料を継続的に発掘・公刊してきたことにある。フロイトに関しては、実際に彼の分析を受けた患者たちの史料からフロイトの臨床実践の多様性を示す四十五号の『フロイトの患者たち』(2010)、彼がパリ留学中に執筆を開始しながら公刊していなかった論文を特集した四十九号の『フロイト「神経病理学への批判的序論」(二八八五―八七)——初版と注釈』(2012)、未刊行の書簡をまとめた五十号の『未知のフロイト書簡』(2012)、ハルツ山地への旅行中のフロイトが側近に対して行った口頭発表「精神分析とテレパシー」に登場する患者の身元やオリジナル原稿を明らかにした六十三号の『精神分析とテレパシー』——一九二一年ハルツ講演に登場する三人の患者』(2019)、二〇一七年にようやく公開された史料をもとにした六十九号の『フロイトの患者たちII——米国議会図書館のアイスラー・インタビューから』(2022)、フロイトによるジンメル講義原稿の添削箇所の新現を含む七十一号の『フロイトIIエルンスト・ジンメル往復書簡——一九一八―一九三九』(2023)等も注目に値する。

フロイト以外の精神分析家に関する史料も充実している。めばしい特集のタイトルだけを拾ってみても、四十二号の『エルサレムのアイティンゴン遺稿からの発掘』(2008)、五十五号の『マックスとミラ・アイティンゴン』(2015)、六十一号の『カール・アブラハムIII——源泉と文書』(2018)、六十五号の『オート・フェニヒェル』(2020)、七十四号の『第八回国際精神分析学会大会——百年後に』(2024)、七十五号の『アンナ・フロイトからマックス・アイティンゴン宛書簡(一九二六―一九二八)』(2025)など、いずれも、精神分析史研究における一次史料の基盤を提供するものであると言えるだろう。

『精神分析と歴史』——英語圏の精神分析史

現代の精神分析史研究において、『ルツィファール・アモール』に劣らない影響力をもつ雑誌が、一九九九年（正確には一九九八年末）以来エディンバラ大学出版局から刊行されている『精神分析と歴史 (Psychoanalysis and History)』である。

実は、この雑誌のルーツはフランスにある。精神分析家・精神分析史家であるアラン・ド・ミジヨラが一九八五年——すなわち、前述の「精神分析史シンポジウム」と近い時期——に「国際精神分析史協会 (Association internationale d'histoire de la psychanalyse, AIHP)」を設立し、公式的な精神分析の諸団体を越えた場所で専門家たちを結集させたのがその始まりである。この協会の雑誌として発行されたのが、『精神分析史国際誌 (Revue Internationale d'Histoire de la Psychanalyse)』であり、一九八八年から一九九三年まで全六巻がフランス大学出版局 (PUF) から刊行された。⁽⁴⁰⁾ いずれの巻も膨大な量の論考を収載した大部のものであったが、「読者数の不足と、PUF 側の投資資金の不足が理由」となり、休刊となってしまったという。ミジヨラはその後、それらの研究成果を反映し、『国際精神分析事典』(Dictionnaire international de psychanalyse) というやはり大部の書物を刊行している。⁽⁴²⁾

さて、『精神分析と歴史』の初代編集長を務めたアンドレア・サッバデーニは、当初はミジヨラの『精神分析史国際誌』の英語版を創刊しようとしていたようである。それは、このフランス語の重要な雑誌を英語圏の広い読者の手に取ることができるようにという思いからであったが、実務的な問題で計画は頓挫したという。そこで、ミジヨラの意向を引き継いで新たな英文誌として創刊されたのが『精神

分析と歴史』である。この雑誌は、『ルツィファアーリアモール』の重要な成果の英訳を掲載する媒体としても機能しており、とりわけその書評欄が精神分析史という分野全体の動向の見取り図を提供してくれる点も大きな魅力である。

『精神分析と歴史』にも、さまざまな切り口の特集と数多くの見るべき論考があるが、ひとつには、やはり土地柄や人脈やアーカイヴへのアクセスの良さゆえであろうか、メラニー・クラインの未公刊史料やそれにもとづく研究が掲載されることはこの雑誌の特徴であろう。クラインには二〇一六年にR・D・ヒンシェルウッドの手で翻刻・刊行された自伝があるが、ロンドンのウエルカム図書館にあるメラニー・クライン・アーカイヴにはそれとは別のタイプ打ちの断片的な自伝のメモが残されており、『二十世紀の女性精神分析家たち』で日本でも知られているジャネット・セイヤーズが翻刻した後者の自伝(45)は前者を補うものであると言える。同じくセイヤーズの手になる、クラインから美術批評家・画家のエイドリアン・ストークスに宛てた一九四〇年から一九五九年までのおよそ二十年にわたる書簡群も公刊されている。(46) そのほかにも、ヒンシェルウッドがメラニー・クライン・アーカイヴに収蔵されていた一九三四年のタイプ打ち原稿をもとにフロイト的な「抑圧」概念からクライン独自の「分裂」概念への移行を彼女の個人史における苦境にも関係づけながら再構成する論文、パウラ・ハイマンの逆転移論についての論文(48)——クラインはハイマンとの確執の表面化を避けるがゆえに批判を公言しなかったが、彼女もまた逆転移が患者の投影プロセスによって引き起こされる現象であることを洞察していたことが、未公開ノートをもちいて明らかにされる——など、臨床的な観点からも興味深い論考がある。

また、先にも言及したフォレスター——彼は同誌の二代目の編集長を務めた——の仕事にも注目しておかなければならない。彼が同誌において発表した論文を中心にまとめられた『ケンブリッジのフロイ

ト』(2017)⁽⁴⁹⁾は、フロイトが一度も足を踏み入れたことのないケンブリッジで、一九二〇年代にフロイトの知的影響がいかに巨大であったかを論じたものである。⁽⁵⁰⁾ケンブリッジ大学に起源をもつ英国の知識人・芸術家・作家たちの集団であったブルームズベリー・グループ、バートランド・ラッセルやルートヴィヒ・ウィットゲンシュタインなどの哲学者、あるいはA・G・タンズリーなどの自然科学者への影響の分析を通して扱う彼の仕事は、ロンドン中心史観になりがちなイギリスの精神分析史を相対化するものであるとも言えるだろう。

総じて、『ルツィファアー・アモール』がアーカイヴの発掘と校訂テキストの公刊に強みをもつとすれば、『精神分析と歴史』はそれに加え、歴史学やその他のさまざまな領域——フォレストはジャック・ラカンのセミナーの翻訳も行っており、ミシェル・フーコーを参照することも多い——の精神分析史への応用という方向性もみられる。

『国際精神分析雑誌』——精神分析の世界史

一九二〇年にフロイトの協力のもと、アーネスト・ジョーンズが創刊した、精神分析の領域における最大規模の雑誌のひとつが『国際精神分析雑誌(The International Journal of Psychoanalysis)』である。同誌には、ここまで紹介してきたような精神分析史研究の盛り上がりを受けてであろうか、二〇〇七年以降、『精神分析史(History of Psychoanalysis)』が同誌の目次のなかの明確なセクションとして扱われるように

なっており、多くの号にこの分野の研究が掲載されている。先に紹介した『ルツィファー・アモール』の掲載論文が再構成されて英語で発表されることもある。

ちなみに同セクションには『国際精神分析雑誌』それ自体の歴史を既存の研究を取りまとめつつ扱う論考も掲載されている。その論考では、ジョーンズが同誌によって「フロイト自身によって認可された独占」を実現しようとしていた――A・A・ブリルらによるアメリカ版のフロイト訳をよく思っていなかったことはその一因であろう――こと、また同誌を「科学的かつ医学的に受け入れ可能な精神分析の権威ある声」として確立しようとしていたこと、反対に後任のジェームズ・ストレイチーはむしろ同誌を開かれた場としようとし、D・W・ウィニコットやジョン・ボウルビーなどの新しい書き手に誌面を提供したこと、その背景にはクラインとアンナ・フロイトのあいだの論争でイギリス精神分析協会が分裂の危機に陥っていたという事情があったことなどが触れられている。⁽⁵¹⁾

同誌には、複数の言語での投稿を受け付ける国際誌としての性格を反映してか、精神分析の世界史を扱う論考が散見される。とりわけ目立つのは、精神分析(ないし精神分析家)自身がこうむった攻撃やトラウマに関する論考である。ホロコーストを直接・間接的に体験し、生き延びた分析家たちの「生存者罪悪感」と喪の作業を扱う論考や、一九一三年のドイツ精神医学会においてオイゲン・ブローラーに精神分析に対する支持を撤回させるためにアルフレート・ホッヘやエミール・クレペリンらが組織的に行った工作活動を扱う論考、⁽⁵³⁾敵性外国人として拘禁されたライヒがそれ以後「政治的なライヒ」を封印した経緯を「E」文書まで用いて分析する論考など、⁽⁵⁴⁾一次史料の凄みが伝わる力作が多い。

もうひとつのトレンドは、ジェンダー史観の高まりを反映してのものであろうか、女性分析家を取り上げるものである。マリー・ボナパルトによる作家夫妻の分析、⁽⁵⁵⁾アンナ・フロイトの機織りと喪の作業

の関係、ザビーナ・シュピールラインの「死の欲動」理論に対する先駆性や言語論などが取り上げられている。とりわけアンナ・フロイトのハムステッド戦時保育園での仕事をたどり直すニック・ミジリーの論考は、現在でもアンナ・フロイト・センターで中核的なものとして継承される考えの起源を教える。

くわえて、やはり同誌ならではと云うるのは、この分野における個別の症例を紐解いたり、臨床家が精緻に読み直す論考である。なかでも、成人となった「ピグル」本人との対話から、ウィニコットが扱わなかったホロコーストによる世代間トラウマや名前に潜むトラウマの問題を掘り起こす論文が白眉であろう。

もちろん、フロイト研究も興味深いものが散見される。一八八六年にベルリンで女性への「治療」としての現実の去勢(卵巣切除術)を目撃した体験が、患者側の「幻想」として扱われるようになる過程について、エマ・エクスタイン事件をその範例として論じる論考や、未公表書簡からフロイトの宗教教師ハンメルシュラーク家との関係を明らかにし、長年エマ・エクシュタイン説とアンナ・ハンメルシュラークのあいだで意見が分かれていた「イルマの注射の夢」のイルマの人物同定を再考する論考など、この分野の実に細やかな研究のあり方に驚かされること請け合いです。加えて、一九二〇年代前半のベルリンとロンドンにおけるフロイト的な「性的なもの」の優位」からの離脱と「攻撃性」への移行——すなわち、クライン派の形成準備——をさまざまな一次史料から描き出したマイの論文は、精神分析の理論史のお手本のような論考である。

モノグラフ——精神分析史研究の多様性

雑誌のみならず、重要なモノグラフの出版もこの分野の確立に寄与している。

まず通史という意味では、フランスのエリザベート・ルディネスコの仕事がある。『フランスにおける精神分析の歴史』(1982/1986/2023)⁽⁶³⁾で知られる彼女の『ジークムント・フロイト伝』(2014)⁽⁶⁴⁾は、種々の史料の考証に基づいており、長らくピーター・ゲイの『フロイト』が占めてきた位置に並ぶ新しい標準的伝記と言えるだろう。

そのほかの通史的な著作として、ワイル・コーネル医科大学で精神医学史研究所を主宰するジョージ・マカーリの『心の革命——精神分析の創造』(2008)⁽⁶⁵⁾が挙げられる。かつてに比べて精神分析史に関する書物が翻訳・紹介されることが少なくなった日本でも翻訳刊行された同書は、十九世紀後半のヨーロッパにおける諸科学の大変動のなかにフロイトを位置づけ、やはり「偉人」フロイト一人ではなく、同時代人たちが織りなすネットワークのなかで精神分析が創造されたことを示しているという点で、「ニュー・フロイト・スタディーズ」体制下における通史と評することが許されるだろう。

ドイツ語圏で言えば、先述のマリネッリとの共著『フロイト以後の夢』に先行するアンドレアス・マイヤーの単著『プシュケーの顕微鏡』(2002)⁽⁶⁶⁾は、やはり精神分析を「孤独な天才」によって発見されたものではなく、ナンシーやパリ、ウィーンの催眠実験室における身体・装置・患者・記録の微細な配置から出発した臨床的な舞台設定として位置づけ直した仕事であり、現代の科学史の視点を精神分析史に持ち込んだ先駆的な試みである。マイの『作業中のフロイト——精神分析の理論と実践の成立過程』⁽⁶⁷⁾は、

彼女が行ってきた実証系の精神分析史研究の集大成であるが、やはりフロイトの仕事が彼ひとりの天才性に帰せられるものではなく、先駆者や同僚や弟子との相互作用のなかで生まれたものであることが強調されている。

各国の精神分析運動史についても、興味深いモノグラフが続々と刊行されている。シュレーターの名著『独自の道を——一九四五年までのドイツにおける精神分析の歴史』⁽⁶⁸⁾は、『ルツィファール・アモール』誌を中心に積み重ねられてきた実証研究の到達点であり、ドイツにおける精神分析の受容・制度化・ナチ期の屈折を、一次史料に徹底的に依拠して書き記したものである。ジョイ・ダモウジとマリアーノ・ベン・プロットキンの編著『精神分析と政治——政治的自由が制限された状況下での精神分析史』⁽⁶⁹⁾は、ファシズム期のイタリア、ペロン期アルゼンチン、ブラジル軍事政権下、マッカーシズム時代のアメリカなどの民主主義の危機のなかで精神分析がどのような変容を遂げたかを比較する視座を与えてくれる。その他、エラン・ロルニクの『シオンにおけるフロイト——精神分析と近代ユダヤ人アイデンティティの形成』⁽⁷⁰⁾、オムニア・エル・シャクリの『アラビアのフロイト——近代エジプトにおける精神分析とイスラム』⁽⁷¹⁾等の研究のグローバルな展開は、日本における精神分析運動史を考えるうえでも重要なヒントを与えてくれるかもしれない。

ここまで紹介してきたもの⁽⁵⁾⁽⁶⁾系、実証史学系に収まらないものとして紹介しておきたいのは、フランスのピエール・アンリ・カステルの仕事と、文化史・社会史系の仕事である。高等師範学校出身でジャック・デリダのもとで哲学博士号を取得し、さらに心理学においても博士号をもつ哲学者・精神分析家であるカステルは、『ヒステリーの論争』⁽⁷²⁾（1998）および、『罪ある者たちの終焉』⁽⁷³⁾（2012）によって、カングレムのようなフランスのエピステモロジーの伝統を継承しつつ、精神病理学と精神分析の概念史を

描いてきた。とりわけ、フロイト的な「強迫神経症」から現代の「強迫性障害(強迫症)」への転換を、個人主義と自己統御の長期的な歴史として描きだし、フーコー的な「規範への逸脱としての狂気」ではなく「規範化」正常化そのものに病む」という問いを立て、最後には臨床事例によって例証を行う後者は、哲学・エピステモロジー・臨床という彼の資質がいかなく発揮された名著である。

文化史・社会史としては、イーライ・ザレツキーの『魂の秘密——精神分析の社会文化史』(2006)⁽⁷⁴⁾がある。彼は、個人の内面を極めて私的な象徴や物語から構成されたものとみなす「個人的無意識」の発見を精神分析の最大の貢献だと捉え、それが「解放」的に機能することもあれば社会への「適応」を促す装置でもあるという両義性を労働・家族・ジェンダー体制の変容のなかにみる。ザレツキーが切り開いた社会文化史のアプローチを継承したのがダグマー・ヘルツォークの『冷戦期のフロイト——破局の時代の精神分析』(2017)⁽⁷⁵⁾であり、彼女は第二次世界大戦後から一九七〇年代にかけて、ナチズムとホロコーストの衝撃、性革命、フェミニズム、ゲイ解放運動、反植民地主義・反戦運動といった時代状況のなかで、精神分析がどのように規範的(保守的)ないし社会批判的になりえたのかを論じている。フランクフルト学派の系譜に属するジョエル・ホワイトブックの『フロイト——知的伝記』(2017)⁽⁷⁶⁾は、フロイトにおける父性原理が啓蒙的理性に対応し、母性原理は「暗い啓蒙」——これはフランクフルト学派的な「啓蒙の自己批判」のことであり、ニック・ランドらのそれとは違うことに注意されたい——が引き受けるべき課題であると位置づけた上で、フロイトは「暗い啓蒙」の側で非合理を引き受けるはずが、母との早期関係におけるトラウマゆえにそれを十分に引き受けることができず、その抑圧されたものの回帰が女性性論やモーセ論となって現れたと主張している。

なお、修正主義の側も完全に沈黙したわけではない。フランスにおける「フロイト・ウォーズ」の火

付け役となった『精神分析黒書』の共著者でもあるミッケル・ボルクハフ・コブセンは、『ソーヌ・シャム
ダサーニとの共著』『フロイト・ファイルズ——精神分析史徹底調査』(2012)を発表している。同書は、
フロイトと精神分析運動が、「歴史の書き換え」や「伝説作り」によって自らの正統性を構築してきた
ことを、近年の精神分析史研究に向けてもう一度突きつけようとする挑発的な書物と言えるだろう。ボ
ルクハフ・コブセンには実名が判明しているフロイトの患者三十一名についての短評をまとめた『フロイ
トの患者たち——その運命』(2011)もあり、これはそれぞれの患者について手軽に信頼性の高い情報を
得るために有用であるものの、やはり修正主義的な意図ゆえかフロイトの治療によって改善した患者の
数を少なく見積もるように誘導するなどの問題があることが指摘されている。⁽⁸⁰⁾

最後に——個々の書籍の紹介をする余裕はないが——モノグラフのシリーズとしては、ピーター・L・
ルドニツキー責任編集の叢書「精神分析史シリーズ」(History of Psychoanalysis Series)も、この分野の発
展に大きな役割を果たしている。もともとカルナック・ブックスから刊行されてきた同シリーズは、ラ
ウトレッジに統合されて以降も継続的にこの分野の重要なモノグラフを世に送り出し続けている。

日本の読者が手に取りやすいものとしては、リチャード・A・スクーズの『フロイトとアンナ・O
——最初の精神分析は失敗したのか』(2006)がある。⁽⁸¹⁾同書は、修正主義者たちがアンナ・Oの治療を
「虚偽」とみなす根拠を綿密な史料批判によって覆し、ジョーンズや修正主義者たちが作り出した「失
敗神話」に反駁する、実証系の精神分析史の一冊である(たとえば、ブローイアーによる治療終了後のベルヴュー・
サナトリウムへの入院は処方薬依存からの離脱のためでありヒステリー症状の再発のためではないこと、彼が転移
性恋愛によって逃走したという説は時系列から言って成り立たないこと等が示されている)。また、フロイトが
ウィーンからパリを経てロンドンへと脱出することを可能になった顛末を描くデヴィッド・コーエンの

『フロイトの脱出』(2009)⁽⁸²⁾も邦訳があるが、こちらはむしろ歴史ノンフィクションといった趣であり、専門誌の書評では史料の扱い等に関する疑義も出ている。⁽⁸³⁾

日本の精神分析史——その可能性

最後に、日本の精神分析史について検討しておこう。まず指摘しておかなければならないのは、ここまでの紹介からもわかるように、「フロイト・ウオーズ」の時代はまだしも、「ニュー・フロイト・スタディーズ」の時代以降の著作や論文が、ほとんど日本で翻訳紹介されていないという事実である。このことは、翻訳文化が盛んであった日本においては驚くべきことであるが、昨今の出版事情の影響であろうか、あるいは精神分析それ自体の相対的なプレゼンスの低下ゆえのことであろうか。

むろん、近年の精神分析史研究の成果は多くの臨床家や研究者によって参照されている。一般読者がこの分野の研究概要を日本語でつかむために勧められるものはいくつかあるが、妙木浩之『フロイト入門』(2000)⁽⁸⁴⁾は刊行時期までの研究成果、とりわけ「フロイト・ウオーズ」のインパクトを受け止めて書かれた入門書である。福本修『精神分析の現場へ』(2015)⁽⁸⁵⁾は、特に第Ⅲ部「開業のフロイト」において、マイの患者カレンダー研究など、本稿で紹介してきたような実証系の研究を日本語で紹介している貴重な仕事である。森茂起は、先にふれた一次史料にもとづくフェレンツイ再評価を日本に集中的に紹介している。⁽⁸⁶⁾北村隆人『共感と精神分析』(2021)⁽⁸⁷⁾は、精神分析の各学派の「共感」論を網羅しているが、そ

の際に数多くの実証的な研究が参照されている。藤井あゆみ『メランコリーのゆくえ』⁽⁸⁸⁾はマイラドイツ語圏の精神分析史研究を参照したすぐれた理論史である。そのほか、日本精神医学史学会の雑誌『精神医学史研究』には、定期的に精神分析の理論史等の論考が掲載されている。

シンポジウム等について言えば、日本精神医学史学会でのシンポジウム「精神分析運動の歴史」(2017)は、日本・フランス・ドイツ・ソビエトの各国の精神分析運動の歴史を扱うものであり、『精神医学史研究』第二十二巻一号に収録されている。⁽⁸⁹⁾日本ラカン協会のワークショップ「精神分析運動史——ウィーンとベルリンの栄光」(2019)はウィーンにおけるフロイトとユングの関係やベルリンの精神分析インスティテュートの成立と展開が詳細に検討するものであり、『I.R.S.——ジャック・ラカン研究』第十九号に収録された。⁽⁹⁰⁾同協会も関わった「フェレンツィ生誕一五〇年シンポジウム——フロイトとの終わりなき対話」(2023)は、その後『思想』誌(岩波書店)でその一部が掲載された。⁽⁹¹⁾

日本を主題とする精神分析史研究としては、北山修が編者を務めた『フロイトと日本人——往復書簡と精神分析への抵抗』⁽⁹²⁾(2011)や、西見奈子『いかにして日本の精神分析は始まったか』⁽⁹³⁾(2019)がある。同書は、日本の精神分析におけるパイオニアである矢部八重吉、丸井清泰、大槻憲二、中村古峽、古澤平作の五人の人生と臨床、そして残された史料を丹念に調査し、精神分析臨床の文脈における日本の草創期の全貌を明らかにした。また、西は編著『精神分析にとって女とは何か』⁽⁹⁴⁾(2020)が、フェミニズムと精神分析の歴史、日本の精神分析における女性論の変遷を取り上げている。永尾雄二郎らは、近代アジア宗教史の研究者クリストファー・ハーディングとともに、古澤平作にまつわるオーラル・ヒストリーを発表している。⁽⁹⁵⁾また、最近、筆者らも微力ながら、日本の精神分析を諸団体や雑誌に注目して紹介する論考を発表した。⁽⁹⁶⁾

もっとも、日本においては、欧米のような独立した学術分野としての精神分析史は、制度的にはいまだ確立途上にある。もちろん、日本では精神分析が、臨床のみならず文学、哲学、現代思想、教育学など人文科学の多彩な領域に影響を与えたことは無視できず、そのなかには精神分析史的な視野をもつ多くの著作があるが、精神分析に関心をもつ人文科学系の研究者間の相互交流が不足していたことは精神分析史というディシプリンの不在の一因かもしれない。また、欧米に比べると、歴史学や科学史の研究者から精神分析が研究対象としてみられることが少なかったようであることも指摘できるだろう。

日本において精神分析史研究と関係するもうひとつの重要な水脈として、「翻訳」を通じた貢献が挙げられるだろう。岩波書店から刊行された『フロイト全集』⁽⁹⁸⁾は、ドイツ語版全集(Gesammelte Werke)の全訳というだけでなく、研究版(Studiensausgabe)、英語の標準版(Standard Edition)、フランス語の全集(Euvres complètes)等の注釈を一望できるようにした点で世界に類をみない仕事である。また、金関猛は、石澤誠一をリーダーとする「フロイト研究会」での作業をもとに、フロイトの主要著作についてとりわけ初版にこだわった精緻な翻訳に継続的に取り組んできた。その成果としては、『ヒステリー研究』(2004)、『あるヒステリー分析の断片』(2006)、『シュレーバー症例論』(2010)、『夢解釈〈初版〉』(2012)などが発表されている。同じ研究会での翻訳をもとにした光末紀子の『性理論のための三論文(一九〇五年版)』⁽¹⁰⁰⁾は、多くの著作が版を重ねるごとに増補改訂されてきたフロイトの著作のなかでもとりわけ変更箇所が多い同書の初版の姿を示し、その改訂を丁寧に追跡し、さらにはフロイトが言及した性科学者らの人名リストや詳細な索引まで付した決定版である。この翻訳には、初版におけるフロイトのラディカルさに着目するオランダのフィリップ・ファン・オートとヘルマン・ヴェステリンクラの精神分析史研究の仕事との関連性を示す解題・解説も付されている。このような初版テキストの翻訳は、フロイトの思

考過程を可視化する営みであり、精神分析史研究の重要な方法のひとつであると言えるだろう。

おわりに

筆者らが二〇二一年から継続してきた「精神分析史と人文科学」シンポジウム、およびこのたび創刊される本誌は、前節で概観した日本の精神分析史研究とその隣接領域をリンクさせ、その強みを活かしつつ、本稿で紹介してきたような国際的な研究動向も睨みつつ、日本独自の成果と研究者間の交流を生み出すことをその目的としている——少なくとも発起人のひとりである筆者はそう考えている。

さて、以下はまったくの私見であるが、これは必ずしも「欧米の研究水準に追いつく」ということを意味するわけではない。というのも、STSや実証系の精神分析史研究においては、もはやフロイトが精神分析を「発明」したという考えは棄却され、フロイトの「革新性」なるものは彼の前史や同時代の人的・物質的ネットワークのなかに還元されることが半ば前提となっており、もちろんそのような近年の精神分析史の研究成果の豊穡さは無視できるものではないのだが、しかしこの種の研究を徹底すれば徹底するほど、逆説的にあるひとつの問いが浮かび上がってくるのではないかと筆者には思われるのである。それは、フロイトと同じ条件に置かれていた他の同時代人ではなく、なぜほからならぬフロイトにおいて、「精神分析」が可能になったのか？ という問いである。

もちろん、このような問いを立てることは、ともすれば後知恵の論点先取、あるいは党派的な「偉人

伝」への回帰にもなりかねない。けれども、ここで真に重要なのは、フロイトが彼の同時代人と比べていかに特殊であったのかを問うことではない。むしろ、フロイトが自らを精神分析の創始者として打ち立てたという行為のあり方を問うことである。

すでに本文や注(19)で紹介したように、フォレストは、精神分析を「科学か疑似科学か」という二分法の外で考えるべき対象として措定した——すなわち、たとえ精神分析に弱みがあったとしても、それは精神分析を科学史的研究の対象から外す理由ではなく、むしろ対象として引き受ける理由である、と。この論理の逆転をもう一度使うことはできないだろうか？ フロイトの創設者としての自己措定が神話的存在であることは、それを実証的な史料によって解体することによって解決されるべき問題であるよりも、むしろその神話的な自己措定という行為、それ自体を歴史の対象にすることを私たちに要請しているのではないだろうか？ その意味において、「フロイトの欲望が、彼が無意識と名づけた経験の領野への入口を発見できたのはいかなる特権によってなのか」⁽¹⁰²⁾というラカンの問いは、フロイトの「神話」⁽¹⁰⁰⁾化であるというよりも、現代の精神分析史の研究水準を踏まえた上で再開されるべき問いとなって私たちの前に立ち現れるのである。

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

- (1) いくつかの文献の存在とその文脈については、井上卓也氏と藤井あゆみ氏からの教示および資料提供を受けた。また、楠井玲奈氏は主要な雑誌の書評欄を取りまとめ、おちおちの全貌を把握させてくれた。この場を借りて感謝申し上げる。なお、本誌誌中 JSPS 科研費 JP22K12989、JP23KK0218 の助成を受けたものもある。
- (2) Sigmund Freud, *Zur Geschichte der psychoanalytischen Bewegung*, in *Gesammelte Werke*, Bd. 10 (Frankfurt am Main: Fischer, 1999), 43-113. 福田覚訳「精神分析運動の歴史のたぐい」『フロイト全集』第十三巻(筑波書店 二〇一〇年)。
- (3) Fritz Wittels, *Sigmund Freud: Der Mann, die Lehre, die Schule* (Leipzig; Wien; Zürich: E. P. Tal, 1924).
- (4) Stefan Zweig, *Die Heilung durch den Geist: Mesmer, Mary Baker-Eddy, Freud* (Leipzig: Insel, 1931). 佐々木斐夫ほか訳「精神治療」(『オースチ書房』一九三三年)。
- (5) ヴェルナー・ヘンリッヒ・グロート、重訳『ユング』。Cf. Siegfried Bernfeld, *Freud's Earliest Theories and the School of Helmholz*, *Psychoanalytic Quarterly* 13 (1944): 341-62., *Freud's Scientific Beginnings*, *American Imago* 6 (1949): 163-96., Sigmund Freud, M.D., 1882-1885, *International Journal of Psychoanalysis* 32 (1951): 204-17. 主要論文は後述 Siegfried Bernfeld, *Bausteine der Freud-Biographik* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1981) にまとめられている。
- (6) Ernest Jones, *The Life and Work of Sigmund Freud*, 3 vols. (New York: Basic Books, 1953-1957). 竹友安彦ほか訳『フロイトの生涯』(紀伊國屋書店 一九六四年)(抄訳)。
- (7) Peter Gay, *Freud: A Life for Our Time* (London: J. M. Dent & Sons, 1988). 鈴木晶訳『フロイト (1・2)』(オースチ書房 二〇〇四年)。
- (8) たぐい『フロイトの晩年の主治医であったマックス・シュールによる次のフロイト伝がある。同書が「イルマの注射の夢」のイルマの同定についてヘンリッヒ・グロートインの説の初期の出典にある。Cf. Max Schur, *Freud: Living and Dying* (New York: International Universities Press, 1972). 安田一郎ほか訳『フロイト——生と死』(誠信書房 一九九九年)。
- (9) Lydia Marinelli and Andreas Mayer, Editors' Introduction: *Forgetting Freud? For a New Historiography of Psychoanalysis*, *Science in Context* 19, no. 1 (2006): 1-13.
- (10) Henri F. Ellenberger, *The Discovery of the Unconscious: The History and Evolution of Dynamic Psychiatry* (New York: Basic Books, 1970). 木村敏ほか監訳『無意識の発見——力動精神医学発達史 (1・2)』(弘文堂 一九八〇年)。
- (11) Frank J. Sulloway, *Freud, Biologist of the Mind: Beyond the Psychoanalytic Legend* (London: Burnett Books, 1979).
- (12) Jeffrey Moussaieff Masson, *The Assault on Truth: Freud's Suppression of the Seduction Theory* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1984).

- (13) Adolf Grinbaum, *The Foundations of Psychoanalysis: A Philosophical Critique* (Berkeley: University of California Press, 1984). 村田純一が訳『精神分析の基礎——科学哲学からの批判』(産業図書 一九九一年)。
- (14) Frederick Crews, *The Memory Wars: Freud's Legacy in Dispute* (New York: New York Review of Books, 1995). もともとこれらの一連の出来事は単なる騒動であっただけでなく、精神分析の歴史記述に欠けがちな視点を明らかにするとともに、フロイトのアーカイヴ管理の問題を明るみに出した。特にマッソンのものは、フェミニズム的研究の道をひらいたと言えるし、これらの出来事がなければ、フロイト関係の史料の多くが今のうちに広く閲覧可能にはならなかっただろう。
- (16) 「フロイト・ウォーズ」以外にも、現代の精神分析史研究の誕生のきっかけとして、ポール・ローゼンの仕事をあげるべきであるかもしれない。存命中のフロイトの弟子や関係者にインタビューを行い一種のオール・ヒストリーを描いた彼は、クルト・アイズラーなどの正統派から「逸話に偏っている」として執拗に批判された。そのような経緯もまた、実証的な研究の必要性を研究者たちに認識させたと言える。Cf. Paul Roazen, *Brother Animal: The Story of Freud and Tausk* (New York: Alfred A. Knopf, 1969). 小此木啓吾編訳『ブラザー・アニマル——フロイト・タウスクの世界』(誠信書房 一九八七年) Freud and His Followers (New York: Alfred A. Knopf, 1975). 岸田秀が訳『フロイトと後継者たち』(上・下) (誠信書房 一九八〇・一九八八年)° Elisabeth Roudinesco, Paul Roazen (1936-2005), *European Journal of Psychoanalysis*, no. 22 (Winter-Spring 2006).
- (17) フォレスターの仕事については、以下の論文、および注(19)に示すマイヤーの論文が詳しい。Anne Ber-Schiavetta, *Histoire de la psychanalyse, histoire des sciences: Renouvements et convergences*, *Revue française de psychanalyse* 84, no. 1 (2020): 223-32. 井上卓也「シモン・フォレスターと精神分析」『哲学の探究』第四十七号(二〇二〇年) 七九—一〇〇頁。
- (18) John Forrester, *Dispatches from the Freud Wars: Psychoanalysis and Its Passions* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1997).
- (19) マイヤーは「フロイト・ウォーズ」においてなされたような様々な批判を受けてきた精神分析が、種々の「弱み」をもつにもかかわらず、科学史・科学哲学の正当な対象である」とするこの逆転を「フォレスターの公理(Forrester's axiom)」と呼ぶ。Cf. Andreas Mayer, *Why Does Psychoanalysis Matter to History and Philosophy of Science? On the Ramifications of Forrester's Axiom*, *Psychoanalysis and History* 19, no. 2 (2017): 151-65.
- (20) フォレスターの有名な論文「もしもならば、何か——症例による思考」は、ケンブリッジ大学での同僚であったハッキンズのいう六つの「推論のスタイル」に、精神分析の固有の「症例による推論(reasoning in cases)」を付け加える。いわく、精神分析の言説は「その人の人生をその人の人生たらしめている特殊かつ独特の事実のための新しい形式を約束する」と同時に、

「そのような人生の語り方を公的なものとし、科学的なものにしようと試みる」という、それ以前には決して存在しなかったような言説であり、それは普遍的な法則を個別の症例に適用したり、あるいは個人のあり方を統計学的な量へと還元したりするような「科学的」な言説とは大きく異なる、固有の認識論的なあり方をもつ。さらにその言説は、転移や逆転移といった分析状況そのものを記述するようになって、「再帰的客観性」と称されるきわめて独特な客観性のあり方を可能にしているの²²⁾。 Cf. John Forrester, *If p, Then What? Thinking in Cases*, *History of the Human Sciences* 9, no. 3 (1996): 1-25.

(21) Lydia Marinelli and Andreas Mayer, *Träume nach Freud: Die »Traumdeutung« und die Geschichte der psychoanalytischen Bewegung* (Wien: Turia und Kant, 2002).

(22) Ernst Falzeder, *The Threads of Psychoanalytic Filiations, or Psychoanalysis Taking Effect*, in *100 Years of Psychoanalysis: Contributions to the History of Psychoanalysis*, eds. André Haynal and Ernst Falzeder (London: H. Karnac Books, 1994), 169-174.

(23) John C. Burnham, *The 'New Freud Studies': A Historiographical Shift*, *The Journal of the Historical Society* 6, no. 2 (2006): 213-33.

(24) マイヤーにとって、このような相互作用に注目するアプローチが重要なのは、彼のいう「文脈の問題」から距離をとるためでもある。たとえば、「フロイトの性理論は、十九世紀末のウィーンのブルジョワ文化の産物である」と論じることが、精神分析を「文脈」のなかに歴史的に位置づけることであるが、しかし、それは精神分析をひとつの文化的反映に還元してしまふことにもなりかねない。けれども、精神分析のテキストは、実践を変え、今度はその実践がテキストを変え、という相互作用のなかで生まれたものである。それゆえ、「フロイト以後の夢」で論じられたようなテキストの共同産出のプロセスそのものを問う「集合的な歴史」と、『無意識の場——催眠と精神分析のセッティングの誕生』で論じられたような実験室・診察室の物質的配置を問う「具体的な歴史」を接合する緻密な歴史記述が求められるのである。 Cf. Andreas Mayer, *Écrire l'histoire de la psychanalyse : le problème du contexte*, *Revue d'histoire des sciences humaines* 30 (2017): 71-91., Andreas Mayer, *Sites of the Unconscious: Hypnosis and the Emergence of the Psychoanalytic Setting* (Chicago: University of Chicago Press, 2013).

(25) ジョーンスの「正史」では、晩年のフレイブンは「精神病的な兆候」を示し、それは「フロイトや彼の学説から離反する」という形で露呈した」とされていた(vol. 3, p. 47)。「相互分析」などの晩年の技法の実像を示す『臨床日記』の刊行(1985)や、ファルツェダーらによるフロイトとフレイブンの書簡集の刊行(1993-2005)は、彼の臨床技法の重要性と、彼がフロイトに与えた影響をあらためて再発見を呼びつけたのである²⁶⁾。 Cf. Sándor Ferenczi, *Journal clinique* (Paris: Payot, 1985), Sigmund Freud and Sándor Ferenczi, *Sigmund Freud - Sándor Ferenczi: Briefwechsel*, 3 Bde. (Wien: Böhlau, 1993-2005).

(26) バーナムは、日本への精神分析の導入を論じた次の論考を紹介しているが、それは当該の論文が、「フロイトの承認を得て

- 正統性を保つ必要性」と「日本の文化的な要請に合わせて概念を同化・変容させる必要性」のあいだの絡み合いを論じており、やはり「生産(フロイトの正統性の伝播)」から「消費(受容者／受容国による変容)」への視点の転換と、両者のあいだの「共同創造」を論じているからである。 Cf. Geoffrey H. Blowers and Serena Yang Hsueh Chi, Freud's Dethi: The Coming of Psychoanalysis to Japan, *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 33 (1997): 115-126.
- (27) フロイトの著作権保護期間は二〇一〇年に切れている。『メンツァー・マナー』誌は当時の巻頭言になじり「この制約からの解放を受け、今後は未公開であったフロイトの書簡をより積極的に掲載していく予定である」と記しているほか、患者史料のプライバシー保護についての(法的ではなく)倫理的な「原則論」がとられて現実離れた運用となりうるとを指摘している。なお、二〇一〇年には米国議会図書館が所蔵する膨大な「シャーマン・フロイト・ペーパーズ(Sigmund Freud Papers)」がオンラインで公開されている。 Cf. Editorial, *Luzifer-Amor* 23, no. 45 (2010): 5-7.
- (28) ヌーレン語圏の研究者たちは、自身の仕事に対して「ロイター・フロイト・スタディー」というアメリカ由来の名称を用いることはなく、単に「精神分析史」と呼ぶ。また、ヌーレン語圏では実証史系の研究のほうが盛んである。
- (29) Franz Baumeier, *Der Fall Schreber*, *Psyche: Zeitschrift für Psychoanalyse und ihre Anwendungen* 9, no. 9 (1955): 513-36.
- (30) Bernd Nitzsche, *Zur Herkunft des 'Es': Freud, Groddeck, Nietzsche - Schopenhauer und E. von Hartmann*, *Psyche: Zeitschrift für Psychoanalyse und ihre Anwendungen* 37, no. 9 (1983): 769-804.
- (31) Johannes Cremerius, *Die Sprache der Zärtlichkeit und der Leidenschaft: Reflexionen zu Sándor Ferenczi's Wiesbadener Vortrag von 1932*, *Psyche: Zeitschrift für Psychoanalyse und ihre Anwendungen* 37, no. 11 (1983): 988-1015.
- (32) Helmut Dahmer, *Kapitulation vor der 'Welanschauung': Zu einem Aufsatz von Carl Müller-Braunschweig aus dem Herbst 1933*, *Psyche: Zeitschrift für Psychoanalyse und ihre Anwendungen* 37, no. 12 (1983): 1116-35., Redaktion der *Zeitschrift Psyche*, ed., *Psychoanalyse unter Hitler: Dokumentation einer Kontroverse* (Frankfurt am Main: Psyche-Redaktion, 1984).
- (33) Bernd Nitzsche, *Schamabwehr per Schuldzuweisung: Vom Umgang der Erben mit der Psychoanalyse im Nationalsozialismus*, *Weltblatt: Zeitschrift für Psychoanalyse und Gesellschaftskritik* 34, no. 2 (2017): 47-90.
- (34) Luzifer-Amor, *Symposion zur Geschichte der Psychoanalyse*. <https://www.luzifer-amor.de/extras/symposion>
- (35) Michael Schröter, Gerhard Fichtner (1932-2012): Ein Nachruf, *Luzifer-Amor* 25, no. 49 (2012): 183-187.
- (36) Ingeborg Meyer-Palmedo und Gerhard Fichtner, *Freud-Bibliographie mit Werkkonkordanz*, 2., verbesserte und erweiterte Auflage (Frankfurt am Main: S. Fischer, 1999).
- (37) Ulrike May, *Freuds Patientenkalender: Siebzehn Analytiker in Analyse bei Freud (1910-1920)*, *Luzifer-Amor* 19, no. 37

- (2006): 43-97.
- (38) Ullrike May, *Der dritte Schritt in der Trieblehre: Zur Entstehungsgeschichte von Jenseits des Lustprinzips*, *Luzifer-Amor* 26 no. 51 (2013): 92-169. この草稿はこうだが、比嘉徹徳が後述する「フロイトの生誕一五〇年記念号」で扱っている論文文化が期待される。
- (39) Sigmund Freud, Ullrike May, and Michael Schröter, *Das Ich und das Es*, Entwurfssfassung von Juli/August 1922, *Luzifer-Amor* 31, no. 62 (2018): 8-37.
- (40) 各号のテーマは順に「第二次世界大戦中の精神分析と精神分析家」、「フロイトの書簡とその書簡の相手／フランスの精神分析家養成」、「非医師による精神分析実践の歴史」、「フロイト著作集編集史／精神分析と人類学」、「精神分析家の政治社会的コミットメント／戦争と死についての時評」初稿／一九三三年のフロイト・インタビュー」、「精神分析と歴史——認識論的問題／催眠、精神分析、精神分析家たち／フランス南部と精神分析」である。
- (41) Jacques Sédot, *Écrire l'histoire de la psychanalyse*, *Topique*, no. 98 (2007): 25-36.
- (42) Alain de Mijolla, ed., *Dictionnaire international de la psychanalyse: Concepts, notions, biographies, œuvres, événements, institutions*, 2 vols. (Paris: Calmann-Lévy, 2002).
- (43) Jane Milton, ed., *Essential Readings from the Melanie Klein Archives: Original Papers and Critical Reflections* (London: Routledge, 2020).
- (44) Janet Sayers, *Mothering Psychoanalysis* (London: Hamish Hamilton, 1991). 大島かおる訳『二十世紀の女性精神分析家たち』（晶文社、一九六三年）。
- (45) Janet Sayers and John Forrester, *The Autobiography of Melanie Klein*, *Psychoanalysis and History* 15 (2013): 127-163.
- (46) Janet Sayers, 'Dear Stokes': Letters from Melanie Klein about Writing, *Painting and Psychoanalysis*, *Psychoanalysis and History* 14 (2012): 111-132.
- (47) Robert Douglas Hinshelwood, *Melanie Klein and Repression: An Examination of Some Unpublished Notes of 1934*, *Psychoanalysis and History* 8 (2006): 5-42.
- (48) Robert Douglas Hinshelwood, *Melanie Klein and Countertransference: A Note on Some Archival Material*, *Psychoanalysis and History* 10 (2008): 95-113.
- (49) John Forrester and Laura Cameron, *Freud in Cambridge* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017).
- (50) John Forrester, 1919: *Psychology and Psychoanalysis*, Cambridge and London - Myers, Jones and Maccurdy, *Psychoanalysis and*

- History 10 (2008): 37-94.
- (51) Dee McQuillan, Publish and Be Fair? 'I Am Myself Strongly in Favour of Doing It': James Strachey as the Candid Wartime Editor of The International Journal of Psycho-Analysis, 1939-1945, *International Journal of Psychoanalysis* 100 (2019): 540-566.
- (52) John J. Hartman, Anna Freud and the Holocaust: Mourning and Survival Guilt, *International Journal of Psychoanalysis* 95 (2014): 1183-1210., David Meghagi, Silvano Arieti's Novel The Parnas: A Scene from the Holocaust, *International Journal of Psychoanalysis* 95 (2014): 1155-1181.
- (53) Ernst Falzeder and John C. Burnham, A Perfectly Staged 'Concerted Action' Against Psychoanalysis: The 1913 Congress of German Psychiatrists, *International Journal of Psychoanalysis* 88 (2007): 1223-1244.
- (54) Philip W. Bennett, Wilhelm Reich's Self-Censorship after His Arrest as an Enemy Alien: The Chilling Effect of an Illegal Imprisonment, *International Journal of Psychoanalysis* 95 (2014): 341-364.
- (55) Rémy Amouroux, Marie Bonaparte, Her First Two Patients and the Literary World, *International Journal of Psychoanalysis* 91 (2010): 879-894.
- (56) Rye Holmboe, Anna Freud's Loom, *International Journal of Psychoanalysis* 102 (2021): 932-949.
- (57) Fátima Caropreso, The Death Instinct and the Mental Dimension Beyond the Pleasure Principle in the Works of Spielrein and Freud, *International Journal of Psychoanalysis* 98 (2017): 1741-1762., Sabina Spielrein's Theory of the Origin and Development of Language, *International Journal of Psychoanalysis* 101 (2020): 706-723.
- (58) Nick Midgley, Anna Freud: The Hampstead War Nurseries and the Role of the Direct Observation of Children for Psychoanalysis, *International Journal of Psychoanalysis* 88 (2007): 939-959.
- (59) Deborah Anna Luepnitz, The Name of the Piggle: Reconsidering Winnicott's Classic Case in Light of Some Conversations with the Adult 'Gabrielle', *International Journal of Psychoanalysis* 98 (2017): 343-370.
- (60) Carlo Bonomi, The Relevance of Castration and Circumcision to the Origins of Psychoanalysis: 1. The Medical Context, *International Journal of Psychoanalysis* 90 (2009): 551-580.
- (61) Gerhard Fichtner, Freud and the Hammerschlag Family: A Formative Relationship, *International Journal of Psychoanalysis* 91 (2010): 1137-1156.
- (62) Ulrike May, We Are Looking Deeper than Freud... On the Departure from the Primacy of the Sexual in Berlin and London

- between 1920 and 1925, *International Journal of Psychoanalysis* 103 (2022): 328-349.
- (63) Élisabeth Roudinesco, *Histoire de la psychanalyse en France*, 2 tomes (Paris: Points Essais, 2023).
- (64) Élisabeth Roudinesco, *Sigmund Freud en son temps et dans le nôtre* (Paris: Seuil, 2014). 藤野邦夫訳 『シーグムント・フロイト——現代のフロイト』 現代のフロイト (講談社 110116号)。
- (65) George Makari, *Revolution in Mind: The Creation of Psychoanalysis* (New York: HarperCollins, 2008). 齊藤大丈人訳 『心の革命——精神分析の創設』 (ちちち書房 110110号)。
- (66) Andreas Mayer, *Mikroskopie der Psyche. Die Anfänge der Psychoanalyse im Hypnose-Labor* (Göttingen: Wallstein, 2002). 巨書館増補第1版が注(付)録として『無意識の聲』に収録。
- (67) Ulrike May, *Freud bei der Arbeit: Zur Entstehungsgeschichte der psychoanalytischen Theorie und Praxis, mit einer Auswertung von Freuds Patientenkalender* (Gießen: Psychosozial-Verlag, 2015).
- (68) Michael Schröter, *Auf eigenem Weg. Geschichte der Psychoanalyse in Deutschland bis 1945* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2023).
- (69) Joy Damousi and Mariano Ben Plotkin, eds., *Psychoanalysis and Politics: Histories of Psychoanalysis under Conditions of Restricted Political Freedom* (New York: Oxford University Press, 2012).
- (70) Eran J. Rohik, *Freud in Zion: Psychoanalysis and the Making of Modern Jewish Identity*, trans. Haim Watzman (London: Karnac, 2012).
- (71) Omnia El Shakry, *The Arabic Freud: Psychoanalysis and Islam in Modern Egypt* (Princeton, N.J: Princeton University Press, 2017).
- (72) Pierre-Henri Castel, *La Querelle de l'hystérie. La formation du discours psychopathologique en France (1881-1913)* (Paris: PUF, 1998).
- (73) Pierre-Henri Castel, *La Fin des coupables. Obsessions et contrainte intérieure de la psychanalyse aux neurosciences, suivi de Le Cas Paramord* (Paris: Ithaque, 2012).
- (74) Eli Zaretsky, *Secrets of the Soul: A Social and Cultural History of Psychoanalysis* (New York: Alfred A. Knopf, 2004).
- (75) Dagmar Herzog, *Cold War Freud: Psychoanalysis in an Age of Catastrophes* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017).
- (76) Joel Whitebook, *Freud: An Intellectual Biography* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017).
- (77) Catherine Meyer, Mikkel Borch-Jacobsen, Jean Cottraux, Didier Pleux, and Jacques Van Rillaer, eds., *Le Livre noir de la*

- psychanalyse. Vivre, penser et aller mieux sans Freud (Paris: Les Arènes, 2005).
- (78) Mikkal Borch-Jacobsen and Sonu Shamdasani, *The Freud Files: An Inquiry into the History of Psychoanalysis* (Cambridge: Cambridge University Press, 2012).
- (79) Mikkal Borch-Jacobsen, *Les Patients de Freud. Destins* (Auxerre: Éditions Sciences Humaines, 2011).
- (80) Ernst Falzeder, review of Mikkal Borch-Jacobsen, *Les Patients de Freud. Destins* (Auxerre: Éditions Sciences Humaines, 2011), *Luzifer-Amor: Zeitschrift zur Geschichte der Psychoanalyse* 25 (2012): 161-162.
- (81) Richard A. Skues, *Sigmund Freud and the History of Anna O.: Reopening a Closed Case* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006). 岡元彩子・馬場謙一訳『フロイト・アンナ・O——最初の精神分析は失敗したのか』(みすず書房、二〇一五年)。
- (82) David Cohen, *The Escape of Sigmund Freud* (London: JR Books, 2009). 高砂美樹訳『フロイトの脱出』(みすず書房、二〇一四年)。
- (83) M. Molnar, *The Escape of Sigmund Freud by David Cohen, Psychoanalysis and History* 12 (2010): 281-288.
- (84) 妙木浩之『フロイト入門』(筑摩書房、二〇〇〇年)。
- (85) 福本修『精神分析の現場へ——フロイト・クライン・ビオンにおける対象と自己の経験』(誠信書房、二〇一五年)。
- (86) 森茂起『フェレンツィの時代——精神分析を駆け抜けた生涯』(人文書院、二〇一八年)。
- (87) 北村隆人『共感と精神分析——心理歴史学的研究』(みすず書房、二〇二一年)。
- (88) 藤井あゆみ『メランコリーのゆくえ——フロイトの欲動論からクラインの対象関係論へ』(水声社、二〇一九年)。
- (89) 上尾真道『精神分析運動と女性性の問い——応用としての教育の視点から』『精神医学史研究』第二卷第1号(二〇一八年)、二一—一七頁。ニコラ・タジャン「Turquet 報告」および精神分析運動における Lacan の位置」同号、一八一—一三三頁。西見奈子「日本の精神分析運動について」同号、二四—二八頁。國分充「ソビエト・ロシアの精神分析」同号、二九—三四頁。
- (90) 比嘉徹徳『精神分析運動と「実直の倫理」』「I.R.S.——ジャック・ラカン研究」第一九号(二〇二〇年)、一〇三—一二三頁。
- (91) 藤井あゆみ『ベルリン精神分析インスティテュート——その成立から繁栄、そして衰退まで』同号、一三三—一四三頁。
- (91) 工藤顕太『フロイトの欲望とその解釈——フェレンツィ・リトル・ラカン』『思想』第二二〇二号(二〇二四年)、七一—九五頁。氏原賢人「精神分析の超越論的技法論」『思想』第二二二二号(二〇二五年)、六—三三頁。立木康介「委員会」ノカマリラ——フロイト的対話の夜から』『思想』第二二二三号(二〇二五年)、五六—八三頁。その他、これらの著者には以下の関連論考がある。立木康介「日本精神分析史の黎明」『思想』第一〇三四号(二〇二〇年)、一二—二四頁。工藤顕太「精神分析運動の政治史のために——ベルリン、リオ・デ・ジャネイロ、パリ」『思想』第一一六七号(二〇二二年)、六六—八七頁。

- (92) 北山修(編)『フロイトと日本人——往復書簡と精神分析への抵抗』(岩崎学術出版社、二〇一一年)。
- (93) 西見奈子『いかにして日本の精神分析は始まったか——草創期の五人の男と患者たち』(みすず書房、二〇一九年)。
- (94) 西見奈子編『精神分析にとって女とは何か』(福村出版、二〇二〇年)。
- (95) 永尾雄二郎、C・ハーディング、生田孝『仏教精神分析——古澤平作先生を語る』(金剛出版、二〇一六年)。
- (96) Yiwen Yu, Nicolas Tajan, Myu Ishizaki, and Takuya Matsumoto, The History of Psychoanalysis in Japan: An Overview of Japanese Psychoanalysis, Psychoanalytic Associations, and Journals, Journal of the Centre for Freudian Analysis and Research, 33 (2025): 21-43.
- (97) たとえば今世紀以降のものに限ると、下司晶『精神分析の子ども』の誕生——フロイト主義と教育言説』(東京大学出版会、二〇〇六年)、岡田温司『フロイトのイタリヤ——旅・芸術・精神分析』(平凡社、二〇〇八年)、中村靖子『フロイトという症例』(松籟社、二〇一一年)、比嘉徹徳『フロイトの情熱——精神分析運動と芸術』(以文社、二〇一二年)、金関猛『ウィーン大学生フロイト——精神分析の始点』(中央公論新社、二〇一五年)、遠藤不比人『情動的唯物論——モダニズム／精神分析／脱構築』(小島遊書房、二〇一五年)、上尾真道『異境のフロイト』(岩波書店、二〇一六年)などが挙げられるだろう。著作ではないが、佐藤朋子の一連の研究も、フランスの精神分析史のさまざまな断面を丁寧に論じている。Cf. 佐藤朋子『精神分析と政治(フシケボ)によるポスト六八年五月』、『I.R.S.——ジャック・ラカン研究』第十八巻(二〇一九年)、二六—四七頁。
- (98) ジークムント・フロイト、新宮一成ほか編訳『フロイト全集』全十二巻および別巻(岩波書店、二〇〇六—二〇二〇年)。
- (99) ジークムント・フロイト、金関猛訳『ヒステリー研究(上・下)』(筑摩書房、二〇〇四年)、『あるヒステリー分析の断片——ドローの症例』(筑摩書房、二〇〇六年)、『夢解釈(初版)』(上・下)』(中央公論新社、二〇一二年)。
- (100) ジークムント・フロイト、光末紀子訳『性理論のための三論文』(一九〇五年版)『人文書院、二〇一五年版)。
- (101) Philippe Van Haute and Herman Westerink, Reading Freud's Three Essays on the Theory of Sexuality (London: Routledge, 2020).
- (102) Jacques Lacan, Le Séminaire, livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse (Paris: Seuil, 1973). 小出浩之は「精神分析の四基本概念(上・下)』(岩波文庫、二〇一〇年)。
- (103) ラカン自身もまた、「一九六四年に『私は自分ひとりです学派を創設する』と宣言し、一九六七年には『精神分析家は自らのみにあって権威づけられる』と記した。このような発言は、今日の精神分析史研究においては、やはり自らを神話化しようとする『英雄』的身振りとして断罪されることになるだろう。Cf. Jacques Lacan, Autres écrits (Paris: Seuil, 2001).